

故・鈴木栄太郎先生

布施 鉄 治

昭和四十一年九月二十日、鈴木栄太郎先生は、東京都下北多摩郡狛江の自宅で急逝された。

狛江、覚東の先生の部屋からは、松の木々につままれた成城の丘が眺望された。その丘の裾には水田がひろがっていた。少なくとも、昭和三十四年、鈴木先生が北大を停年退職されて、東京に居を構えられた当時は、そこは水田であった。そこには、野鳥があつまっ

た。あるとき、鈴木先生は、そこに戯れ集う野鳥について、そのひとつひとつの生態をたんねんに私に語ってくれたことがあった。狛江の先生のお宅をとり囲むこうした光景はいまも変わらない。たゞ水田の多くが荒廃地となったほかは――。

「最近の百姓は情農になった。」

と先生は亡くなられる半年ほど前に嘆かれたことがあった。自らの生業がもはや生業としての価値をもたなくなったとき、人は、かつては生業であったその労働に対する志向性を失う。

「米には、日本の百姓（先生はふつり農民のことを百姓と表現した）の血と汗の歴史がにじんでいる。この民族の労働と生活の結晶である稲作を、輸出産業にまで高める努力と方向を、日本の農政、また農民が本当に真剣に考えるか否かと農村を近代化するかどうかの分れ道である。」という論旨を、そのとき、先生は熱っぽく語られた。

先生は明治二十七年、長崎県壱岐島で生まれた。まもなく一家は対島にうつられた。

先生は、日本の国、というより、そこで実際に労働し生活をしていく民衆の中に、社会の真の姿を求められた。

「明治の日清・日露戦争のとき、日本人が好戦的であったというのは、あれは嘘ですよ。あれは、国家が権力をもって無理矢理、生活の中から人々を強奪していったのですよ。対島で、私は少年のとき、肉親が夫や息子をとり来まいと、やがて出ていく舟の中で、すがりついて泣いていたのを知っています。あれは国家が権力をもって強奪していったのです。それからあとにおいても、この事実だけは変

わりません。」

あるとき久し振りに、北海道から先生の家を訪れた私に、こうした日本の庶民の生活の歴史がもつ、現実、を力をこめて語ってくれたことがあった。先生は数年前から社会学者の目をもって、日本の社会的実態を捉えた、自伝の筆をすゝめておられた。

先生の、自然村の概念について話をかわしたこともあった。

「日本農村社会学原理」（昭和十五年）を丹念に読んだものならば、それが注意深く、「日本の、しかも現時点」での農村社会の分析であることとわかってあるのに気付くに違いない。その意味で、それは丁度第一次大戦後の日本資本主義体制の全般的危機の中で、寄生地主制そのものが危機におちいり、中農、また耕作地主の創出によって、その体制を補強、国家が、部落、秩序を、まさに権力をもって再編した歴史的過程の中における日本農村社会の現実の調査にもとづく成果の、社会学的結実であるとうけとることができるものであるが、そのとき先生が語られた論旨は整理すると次の如くなる。

ひとつは、先生御自身、農民運動を実践的に指導した友人を親友としてもっておられたが、当時、全体的にみると、農民運動の思想は外から入ったものであって、その思想と行動とは、実際に部落で農業にたずさわる農民の生活と行動の原理の中にとけこんでいかなかったこと。

それではその行動の原理は何か。「私は特殊な事例ではなく、平均的な、もっとも普通なものを見るために全国の調査にでた。村（行政村）にいつても、もっとも、普通の部落」をつねに紹介して

もらった。」

残念ながら、そのときの東北農村からはじめた調査の結果は、そうして、また岐阜でもっともインテンシヴに行なった部落調査の成果も、今日公表されていないが、そうした調査結果の体系化が、「日本農村社会学原理」として今日われわれの前にある。

「もちろん、日本の、むらにはいろいろのタイプがある。しかし全体として、ひとつの類型として、当時の日本の農村社会とはどういう構造をもっているのか。と問われたら、あの、自然村の概念で捉えられうるものが日本の農村社会の現実であった。」とそのとき先生は語られた。「それ以外には言いあらわせない。」と強調された。

しかしまたそのとき、岐阜で学生部長として教々の活動を行なったそのことを、上司から注意され、関心を「農村社会学」へ移されたことも語って下さった。そしてまた

「あなた方、戦後の人は幸福です。私が岐阜で農村調査をはじめた頃には、何時も警察がついてきたのですよ。」ともらされた。

そのとき、私はさらに当時の農村における農民層の階級分化、また小作争議の頻度など、そういう現実について先生はどう考えられるのかをたずねた。先生は静かに微笑された。

「当時は、いいこと、言ってはならぬこと、これは大変なものでした。戦後社会学の研究に入ったあなた方には分らぬことも知れぬが……。」

戦後民主化された日本において、先生の使われた「村の精神」、「家の精神」というタームそれ自身に対する批判も出た。たしかに、その言葉には、戦時下の匂いがする。けれども、少なくとも戦後第一期の民主化路線にそった観念としてではなく、現実の問題として、現に存在する農民の意識、また彼らが現実を構成する社会の社会規範の問題として考えた場合、そして多少とも文化人類学的発想を考慮に入れた場合、この概念（この精神という表現は Cultural Orientation といつてもよいであろう。）のしめすところの社会的実体の存在、かゝる観念体系自身が戦前の寄生地主制体制を維持する機能を果たしたという点は認めねばならぬと思う。

そして段階的にみるならば、所謂血縁の原理にもとづく同族的な家と家との結びつきそれ自身が生産生活組織としての機能を果たした段階から、「家」と「家」との地縁にもとづいた再編が国家権力を背景にそれなりに可能になった裏には、農業生産技術の（しかも戦前の日本の場合、いうまでもなく小農技術としてそれは再編・発展せしめられたものだが）発展がある。もちろん、今日の段階においては、かゝる小農技術体系それ自身が崩壊をはじめ、そしてまた、国家独占資本主義体制下における資本主義的諸関係の、ストリートな形での農村社会への侵入の結果、農村社会がその物質的諸条件のレベルで客観的に変容をはじめたばかりか、具体的な農民の意識と行動において、社会的制度としての「むら」といわれる実体が大きく変容してきていること、こゝにことわるまでもない。

しかしながら、とりわけ戦前の、経済更生運動下における、つま

り鈴木先生がその体系化をなした時代においては、少なくとも、自然村の概念で抽象化されうるような社会的実体として、日本の「むら」が、その国家体制下に存在したという側面のあることは否定できぬところであろう。（もちろん、方法的には所謂、伝統的な社会学のそれであり、したがってギヤルピンの「社会把握技術の導入の上に立って、人々の社会意識およびその表現たる社会制度から村落社会の構成原理を求めるといふ論理がそこにはみられる。

戦前の寄生地主制下における日本農村の階級分化とその構造、そしてまた農民の社会をそうしたものとして存在させた彼らの物質的生産生活の基礎、生産関係レベルでの分析視角はとられていない。つまり、そうした「農民」、「農家」の全生活過程をとりまく、物質的生産生活の基礎的事実の拘束性から、制度の存在形態そのものを捉えるという論理展開はそこではとられていない。その意味で、当時の社会制度としての村落それ自身が、その存在を、自然村という概念においては十分表現しえぬ、という批判は正当性をもって

私は、鈴木先生の北大での最後の助手としてその教えをうけた。私がまだ学部学生であった頃から、先生は、ゼミの学生に対し、まず問題意識をもつこと。あれもこれもと百科全書的知識を求めめることは愚で、本当に現実分析に役立つ方法、自分の方法を身につけるように努力すること。まったく不毛と考えられるような米国の社会学者の説まで、わが国ではその結論だけを、大切にもちこむ風

があるが、社会的現実・文化的風土がことなる日本に、結論だけ
をもちこむということは、それは科学することではないのであって、
われわれが彼らに学ぶべきは、社会分析の方法であること。そうし
て、役に立たない方法はすてること。社会はあなた方の生活の中、
この日本にあること。われわれはまずこの足もとから社会の分析を
はじめて、一般的法則をみちびき出すことができること。等々社会
学を学ぶにあたっての心構えを述べられた。

しかし先生は自説にそった調査だけを強制されるということでは
なかった。個々人のもつ発想を大切にされ、また何よりも、現実の
社会がもつ構造的規則性の発見にするとい関心をむけられた。

私も、先生の市街地調査、都市調査の数々に先輩と共に参加した
が、私が先生と共に参加した農村調査では、札幌市郊外の旧白石村
の農村調査がある。そのとき先生は、有線放送に大きな関心をし
めされた。そして有線はあきらかに、農村のコミュニティ・シヨ
ンネットワーク、したがってまた伝統的な社会学的チームにしたがりな
らば、その社会構造の変容をもたらすものであった。

先生の北大での研究の集大成、「都市社会学原理」は昭和三十二
年に公にされた。

私は、先生の「日本農村社会学原理」と「都市社会学原理」を比
較するとき、そこには方法的に随分と異なつた視角が生じている
と思つている。この点ほもつと詳細な検討が当然必要だが、結論的
にいうと、農民（「家」と「むら」を捉えるアプローチが、いわば
閉された共同体的社会における農民の側からの発想とするならば、

後者には、とにかく全体制的な発想がある（都市の機関説をみよ）
そうした体制に規制されたものとして都市集落の基本的構造と機能
を抽出、しかるのちに、そうしたいわば行動の基本的枠組を規定さ
れた集落の中での、正常人の正常生活の構造論が展開する。

この「都市社会学」における現実分析の枠組のより一層の展開は、
その論理的、内在的発展の必然として「国民社会学」の構想へとむ
かわれた。

私は「国民社会学」という分析枠の中で、先生があらためて今日、
はげしい形で資本主義的分解を、しかも日本の形態で強いられてい
るわが国、農村社会を捉えなおしたとき、そこに、戦前の寄生地
主制下の日本村落と異なつたどのような本質・存在を抽象されたか、
かゝる点についてお教えを受けたかと思つてゐる。

けれども、こうした事柄は、あきらかにあとにつゞく世代がその
課題として説明すべき事柄であらう。

今回、東京教育大学の中野卓先生のお力添で、鈴木栄太郎著作集
が未来社から刊行されることになつた。私はこれを機会に、あらた
めて先生の学問的素養の論理的発展をあとづけ、その中から数多く
のものを学ばせて戴きたいと思つてゐる。（六七年五月二十日）